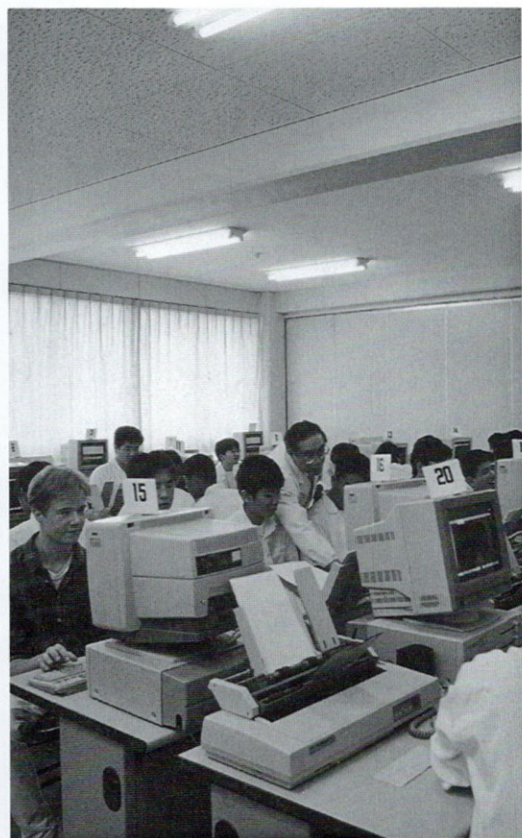


# 教育環境の整備と 新教育の変遷

## 教育環境の整備

昭和五二年四月、本校は校舎焼失という災禍に見舞われた。市の中心部での火災ということもあり、消防では第三出動態勢（第一出動態勢は消防署と火災現場に最寄りの消防団による対応、第二出動態勢では最寄りの消防団のほかに二、三の消防団が応援する。第三出動態勢になると市内すべての分署・消防団の出動にくわえ、近隣町村の消防団にも応援の要請が出される）で懸命の消火活動にあたったが、講堂・図書館・雨天体操場と本校舎のごく一部を除いてほとんどの教室が



焼け落ちてしまった。創立五〇周年という節目を迎え、たばかりの本校に予期せぬ不幸が訪れたのである。在校生はもちろんのこと、その保護者の方々、教職員、同窓生など、本校に縁のあるすべての人々が茫然の態であった。

しかし、教育機関である学校には一刻の停滞も許されない。焼け跡の片付けが終わると、すぐさま授業が再開され、在校生は焼け残った一部の教室と講堂・雨天体操場を仕切った仮教室で授業を受けることになっ

た。中学生は加賀野の寄宿舎を教室にして急場をしのいだ。

その年の九月、新校舎の建設が開始された。すでに仮教室から校庭に建てられたプレハブ校舎に移っていた在校生は、それからの約一年のあいだ新校舎の完成を待つのである。不便なプレハブ生活とはいえ、着々と進む建設工事の様子を見ながら、生徒たちはみな心踊る心境だった。

新しい校舎は翌昭和五三年八月に竣工をみる。完成した新校舎は地上四階、地下一階の鉄筋コンクリート工法によるもので、レンガを埋め込んだモダンな外観を誇り、在校生・教職員ともに感激を新たにした。

明るく広々とした新校舎は生徒の学習面に多大な効果を発揮した。特に、それまでの仮校舎では不如意であった理科の実験などは最新の設備の整った実験室で楽々とこなせるようになったのである。また、明るい音楽室、十分な広さを持った美術室も好評であった。

昭和五六年、四五年間の長きに亘ってその任にあつた三田義一理事長が勇退し、三田義清第三代理事長が就任した。

三田義清理事長は、それまで手狭の感があつた本校の体育施設の拡充に着手、まず昭和六〇年にみずからの所有地を学校に寄贈し、学校はこれをハンドボール、バレーボール、軟式庭球などの多目的コート（現第二

グラウンド）として整備した。つづいて同理事長は創立六〇周年記念事業として体育館およびプールの建設を計画、しかし昭和六〇年一二月、志半ばにして病に倒れ、その遺志は翌六一年四月に就任した三田義之第四代理事長に受け継がれる。

昭和六二年一二月、総工費五億七〇〇万円を投じて建設した体育館が完成。バスケットボール、バレーボールのコートが三面取れる広々とした設計で、二階部にはギャラリーが設けられ、ハンドボールの公式会場に指定された。体育館の北側に完成した新プールは二五メートル、八コース。自動循環浄化装置、温水シャワー等が完備されている。

新グラウンドの整備と体育館・プールの完成は、各運動部に存分な練習の場をもたらし、その成績の向上に大きく貢献して現在にいたっている。体育科の授業の充実にも寄与していることは言を待たない。

さらにこの体育館には、さまざまな学校行事にも対応できるように、大ステージが備わっている。大ステージの下部の収納スペースには五〇〇脚のパイプ椅子が常備されていて、普段の全校集会はもちろん、入学式・卒業式・各種講演会・演奏会などにも随時使用されている。

また、体育館に付設された新校舎には七つの教室が配されており、二階は普通教室が三室としし教室、三

階には流し台付きの書道教室、電算教室、合同教室が置かれているほか、一階にはウエイトトレーニング室が設置され、各運動部の部員が最新のトレーニングマシンで筋力アップに励んでいる。LL教室には生徒用デスクのすべてにテーブデッキ、ヘッドホンマイク、ビデオモニターが備えつけられていて、生きた英語を目と耳から学ぶことができる。電算教室には当初パーソナルコンピュータ六台を置いて中学生の授業を行っていたが、昨今の社会のO A化に対応すべく、平成三年にはパソコンを二四台に増やし、高校三年生の選択科目のひとつとして電算処理の授業を開設するまでになっている。

なお、体育館の完成に先立つ昭和六二年四月には、市内妙泉寺にある山荘が母校に移管され、生徒の研修セミナーハウス用に邸内外を修繕・改造している。

平成四年、遠藤貫中校長が退任、西在家寛第六代校長が就任した。西在家校長は本校の一八回生（旧制）で、生徒として在校中の昭和二二年、生徒会活動における顕著な活躍により石桜会功労章の第一号を受章した人物である。慶応義塾大学卒業後、母校の英語教師として長く生徒の教育・指導にあたってきた。旧制岩手中学一回生である遠藤校長につづいて、ここに二人目の「同窓校長」が誕生したのだった。

平成五年九月、滝沢村に野球グラウンドが完成。そ

れまで校外のグラウンドで練習を続けてきた野球部は念願の専用グラウンドを得た。その後このグラウンドには、内野照明の取り付け、桜球会（野球部OB会）による外野フェンスの取り付けなど、各種の整備が進められている。

平成六年には図書館司書を採用、先の火災の際に重要書類の「避難場所」に使用されたため長く閉館状態にあった石桜図書館の復活が図られた。四万冊余の蔵書数を誇り、市立図書館や県立図書館にもない稀少本を多く有する石桜図書館は、約一年半の蔵書整理期間を経て、平成七年一〇月に一部開館の運びとなった。

昭和五二年以降の本校の歴史は、まさに「教育環境整備の時代」と言っても過言ではない。創立からの五〇年間に匹敵する、あるいはそれを上回る進歩が、この二〇年のあいだにみられたと言っていいだろう。



# 新教育の変遷

では、着々と整備されてきた「環境」という「器」に盛られる教育の本身は、どのように変遷してきただろうか。

昭和四九年に復活した岩手中学には、全国にも類をみない制度があった。それは私立校でありながら授業料を一切徴収しないというものである。新生「岩中」は最初は同窓生の子弟を中心に生徒を集め、現在ではユニークな少人数制の教育方針に期待する父兄・保護者からの支持を受けている。

昭和五〇年代になると高校就学人口が増加に転じ、全県的に昭和六一年度はそのピークを迎えることになった。なかでも盛岡地区での高校就学人口の伸びは特に大きかったようである。

当初、行政は公立校の定員増などでこれに対応していたが、ついに盛岡、都南地区において、相次いで二つの県立高校新設に踏み切った。二校とも一学年の定員が三六〇人の大規模校である。この新設二校の開校は、本校に厳しい状況をもたらしたと言わざるをえない。前述のように、この時期、本校では新校舎のもとに学習環境が大いに整備され、大学進学的面などでもそれなりの成果があがっていた。この好ましい状況を維持・発展させるため、また伝統ある岩手高校の質の

低下を招かないためにも、たとえ定員が割れても一定水準以上の生徒だけを入学させたのは当然である。本校の一学年の定員は二五〇名であるが、入学者数が二〇〇人以下という状態が数年間つづいた。本校の意地だったのである。

ところが、行政は本校に定員の確保を指導してきた。せっかく高校を二つも新設したのにまだ入学できない者がいるということなのだろうが、まったくもって：  
：（このあとはあえて言葉を飲むことにする）。

いずれにせよ、本校はこの指導にしたがって一学年の定員二五〇人を満たす努力をし、教職員一丸となつてさまざまな改革を図ることとなった。

まず、制服の見直しを行なった。それまで本校では標準服（黒の詰め襟学生服）を定めていたが、岩高生としての自覚と誇りを持たせるため、昭和六一年、新たに濃紺の詰め襟学生服を制服に定めた。この制服は非常に上品でセンスが良いと評判で、「紺の詰め襟」は今や岩高生の代名詞になりつつある。

また、豊かな個性や特殊な才能をもつ生徒を受け入れたいという意図のもと、平成三年度からは入試に一部推薦制度を導入した。

さらに、こうして受け入れた多様な価値観をもつ生徒のために、カリキュラムにおいては選択科目を充実させた。本校は普通科のみであるから、授業は大学進学に主眼を置いたカリキュラムなのであるが、二年進級時には生徒個々の希望に応じたコースに進み、明確な目標をもつてそれぞれが得意な分野で個性をみがく。

この基本方針にそって、理科、社会科をはじめとして数学や英語にもグレード制（習熟度別によるクラス編成）を導入、一人一人の能力にあった授業を心がけている。同時に、音楽・美術・書道の芸術科目による情操教育のほかにも、社会の日進月歩のOA化に配慮したコンピュータ講座、国際化を見据えた外国人講師の採用、夏期・冬期休業中の補習、放課後特別講習、個人添削など、今まで以上にきめ細かな対応を行なうことになった。

微笑ましいのは、平成六年度から高校教育が新課程に移行したのにもなつて、男子校である我が校でも家庭科が必修になったことである。身長一八〇センチに届こうかという運動部の選手が、三角巾にエプロンをかけ、「肉じゃが」や「サバのみそ煮」をつくつて職員室におすそ分けに来る。

平成七年四月、西在家校長の退任を受けて前教頭池口杜孝第七代校長が就任、これを機に大学進学にいつもの力を注いでいる。平成七年度からはサテライト

講座を導入。衛星回線を使って全国一斉に放送される予備校の講義を本校で受信し、教室に設置された大型プロジェクションモニターを通して受講する。この授業には専任の教員があたり、補足説明や質問等に答えることによつて、理解をより確かなものにしていく。さらに二〇台のビデオを配置した自習室もあり、講義を繰り返し見ることによつて復習の便を図っている。

サテライト講座の導入にもなつて平成八年度からは入試制度を再度改革、先に述べた推薦制度の対象を中学のクラブ活動における成績優秀者に限ることとし、同時に特別進学コースを設置した。本校の文武両道の伝統を、より強固にするためである。この特別進学コースは入試の問題も一般入試とは別で、定員は三〇名の少数精鋭主義をとり、授業は毎日七時間、一年時からサテライト講座を受講させ、徹底的に鍛えて有名私大、国立大への進学を目指す。あわせて専願制度を取り入れ、本校を第一志望とする生徒を積極的に受け入れることとした。

以上に概観したように、教育環境という「ハード」の面でも、また教育内容という「ソフト」の面でも、この二〇年間の変化には目まぐるしいものがある。石桜精神に立脚しつつ、新しいものを積極的に取り入れ、良き伝統は残し、ますます盛んなうちに我が岩手中・高校は創立七〇周年を迎えたのである。

